

平成 26 年度地域医療・介護連携推進事業 一関コミュニティFM (FM あすも) 番組
放送日：平成 26 年 8 月 20 日 (水) 17:20~17:30 (塩竈一常 GET KING!!)
(再放送：8 月 24 日 (日) 9:10~9:20 REFRESH!!)

「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」

第 4 回放送 一関市病院事業 佐藤元美 管理者

(聞き手：FM あすも 塩竈一常)

塩竈 一関市では、高齢化が進む中、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、医療から介護への切れ目ないサービスを目指しています。この「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」のコーナー、医療機関や介護施設の役割、また、その利用方法などを、医療・介護・福祉の関係者として私たち市民が、ともに理解、協力することを目的に一関市健康づくり課の提供でお送りします。

塩竈 このコーナー第 2 シーズンに入ってきておまして、その第 2 シーズンではですね、各県立病院などの先生にお越しいただきまして、その病院が地域で持っている役割など、またそういった病院を効率的に利用するために私たちがどのような心がけをしたらいいのかなどについてアドバイスをいただいております。私たちも積極的に町の医療体制に関わっていくというのが理想になってくる、これからの社会はそれを目指していかなければならないというのが、このコーナーを通じて分かりかけているんですが、実は、この一関の中でもある地域では、こういった理想っていうところを、実は 20 年前から想定して、いろんな病院づくり、そして地域づくりに結びつけている場所というのがあるんですね。今日は国保藤沢病院の佐藤元美先生にお話を伺ってきました。

塩竈 今日は国保藤沢病院にやって来ました。私の隣には一関市病院事業管理者国保藤沢病院の佐藤元美先生にお越しいただきました。佐藤先生、よろしくお願ひいたします。

佐藤 よろしくお願ひいたします。

塩竈 まずは、この藤沢病院の現在の体制ですが、お医者さんの数、それから看護師さんの数ですとか、また診療体制について、先生教えてください。

佐藤 現在藤沢病院は、常勤医師が 6 名で、看護師が 37 名で診療しております。それで、毎日やっている診療科は、内科・外科・整形外科の 3 科になっております。

塩竈 先ほど病院内の方、歩きましたけれども、患者の方その地元の高齢の方も多いですし、それからバスでの送り迎えっていうのもされているんですね。

佐藤 全体として、入院患者さん外来患者さんともに背景の人口を反映して、高齢者の方が多いです。病院事業では、月曜日から金曜日まで毎日 2 ルート、2 つの路線で患者送迎バスを運営しています。

塩竈 そうですか。また、地元の皆さんを迎える体制といいますか、多分、病院の皆さんでの手づくりの物だと思えるんですけども、入口のところ、飾りがあつたりとかいろいろな物がありましたね。

佐藤 入口のところの七夕の飾りは看護科の皆さんが、今年頑張つて飾りつけをしてくれました。四季折々に、院内が寂しくならないように様々な工夫をしてくれていると思います。

塩竈 病院の皆さんもこの藤沢病院を支えていく、その体制っていうところで、いろんな取

り組みをされているわけなんですけれども、実はこの国保藤沢病院というのは、本当に地元の皆さんによって作り上げられているといえますか、いろんな皆さんのそういった知恵が詰まっている病院というところを今日はご紹介していきたいと思います。まずは先生、この藤沢病院の特徴なんですけれども、昨年、この藤沢病院は開院して20周年を迎えたそうですね。

佐藤 そうですね。平成5年に病院ができて、昨年で20周年を迎えることができました。

塩竈 コンセプトといいますか、その藤沢病院の特徴というと、こういったところになるのでしょうか。

佐藤 藤沢病院の特徴は、病院ができるまでに25年間病院のない町で住民の皆さんが大変苦労したということで、そういった半生っていうか、苦難の歴史を背景に、できるだけ幅広く診療すると、それから午後も診療する、土曜日も診療する、救急は大体断らずに診るようになるというふうなことをモットーにしています。

塩竈 なるほど。これをこう支えていく病院側の体制もそうですけれども、そういったところをこう維持していくために、住民の皆さんっていうのも積極的に、この病院には関わってらっしゃるんでしょうね。

佐藤 そうですね。それが藤沢病院の大きな特徴のひとつというふうな感じで良いと思うんですけれども、藤沢病院は、もともとは、旧藤沢町が独自に運営する病院ということでスタートしましたので、岩手県に多数あります県立病院と違っていて、住民そのものが強い危機意識を持って病院をつくって支えていこうという考え方を反映した病院です。その関係で、病院と病院のスタッフと住民が、いろんな形で交流するチャンネルができています。一番定期的にやられていて古いものが、今まで20年間くらい継続しております「ナイトスクール」と言っていて、私たちが秋に藤沢町内の各地区を巡って地元の住民の皆さんと医療や介護のあり方について話

し合うというふうなことをやっております。

塩竈 こういったところでは、住民の皆さんからは、例えばこういった声っていうのが出てくるのでしょうか。

佐藤 最初の頃の住民の皆さんからのご意見としては、私たちの病院にない診療科をつくってほしいとか、そういうふうなご意見が多かったですけれども、その後、医療について次第にお互いこう勉強していく中で、どうやったら病院を維持できるのか、あるいは病院で働いている医師や看護師が何を望んで、何が一番辛い大変なことなのかっていうふうなことをお互いに話し合うようになりました。住民との話し合いの結果、始めたこともあるんですね。例えば、午前中に患者送迎バスを2台出しているんで、どうしても午前中に自分の足では来れない方が多く来ます。従って、待ち時間が長くなってしまっているんですね。長い待ち時間に対応するというで、午後の外来を始めたり、それから土曜日の外来をやるようになりました。それからバスに乗っても来ることが難しい人や、より重症な方については、かなり手広く訪問診療って言いますが、定期的な医師や看護師が病院から出向いて行って、お家で治療を継続することができるような仕組みも拡大されたのは、住民との話し合いが大きな背景にあると思います。

塩竈 地元の皆さんの様々な知恵が集まることでより良い病院をこうつくっていくという、そのナイトスクールというひとつの形を通じて住民の皆さんが関わってくるという体制がひとつできてきているようです。それから人材を育成していく、この分野でも藤沢病院では取り組んでらっしゃるそうですが。

佐藤 そうですね。現在、例えば、常勤医6名いますが、その中で藤沢町出身者1人だけです。一関市というふうに区切ってみるとそれでも2人だけなんです。この先ずっとその町外、市外、県外の人材によって私たちの病院を維持していくっていうことは、やっぱり不自然だし無理があると思います。ですから、若い

地元の中高生や小学生と病院が、もっと交流してですね、次の世代を育成したいということで、例えば、この数年間やっているものとしては、「ケアチャレンジスクール」というものがありまして、これは夏や冬もやったりするんですけども、1日間か2日間、中学生、高校生の方に集まっていたいて、将来自分がなりたい職種について実地に勉強したり、みんなで障がい者になった時の模擬的な体験をしたり、エキスパートの皆さんのお話を聞いたりというふうなことをやっております。

塩竈 この他にもこの藤沢病院では「藤沢病院を支える会」という、こういった取り組みもあるそうなんです。

佐藤 そうですね。私たちがナイトスクールで各地域をこう回って住民と話し合いをしている間に、住民の皆さんから、こんなに病院が仕事を終わって、夜に地域に出向いて住民と一緒に医療をつくりたいと言ってくれていることは非常にありがたいと、何か住民も病院を応援できる方法はないかっていうふうなご意見やご質問が出るようになりました。そういうふうなナイトスクールの場での議論の積み重ねから、平成21年に「藤沢病院を支える会」という会ができて、現在では22名の会員の皆さんがいて活発な活動をしています。例えば、新しく病院に先生が着任した場合に、その先生のご家族と交流をしたり、それから私たちのところで臨床研修医の研修も一部担当しているんですけど、研修医の研修報告会に皆さんで参加していただいたり、それから先週末あったんですが、全国の医療者や学生を集めて住民と交流する医療の楽しさを実感してもらおうというそういう企画を「藤沢地域医療セミナー」という名前で開催しているんですが、そのセミナーを共催していただいて様々な応援をしていただいております。そういうことでですね、非常に支える会の活動は病院にとって大きな励みになっております。

塩竈 先生、全国的な病院とそれから地域の皆さんの関わり方っていうふうになると、どうし

ても、病院に対しては、住民の皆さんっていうのは、こうしてもらいたい、こうしてもらいたいとか、そういった要望ばかりこう出てくるっていうところが全国的には多いかと思うんですね。その中で住民の皆さんから、自ずとこの支える会っていうのが出てくるっていう、これは本当すばらしいことですよ。

佐藤 本当にありがたいことだと思いますね。そもそも、ナイトスクールを始めるきっかけになったのは、診察しなくても窓口で薬を出すよう簡便にして欲しいっていう住民の要望があったんですね。それは法律的にも医学的にも、とてもできることではなかったの、そういったことをご説明に地域に回って歩いたんですね。それがナイトスクールの始まりでしたけれども、その時に私よく言っていたことは、ナイトスクールの時には、ぜひ患者さんとしてではなくて病院をつくって育てる住民として考えて欲しいっていうことを、ずっとお話ししてお願いしてきました。20年間経ってそういったことが自然に住民の中に浸透して、病院っていうのは患者として利用する、あるいは家族が利用するそういうふうな場所だけじゃなくて、自分たちでつくって育てて大事にしていくもの、そして、さらに、自分たちの子どもや孫たちが将来そこで働く場所になるかもしれないところだっていうふうに変え方が大きく変わってきたと思います。

塩竈 藤沢のですね、この病院なんですけれども、これまでの経緯を先ほど伺いましたんですけども、それまでにあった施設が、まずはこう連携して、ひとつのそういった医療体制をまずつくっていくところからスタートして、続いてはより生活に密着したという形で、その町民病院という形でこうやって設立されてきた。いろいろそういった医療の体制っていうのを、今お話しを伺いましたとおり住民の皆さんとともにこうやって歩んで作り上げてきたっていうのが、本当に町の自慢だなというふうを感じるんですけども、これから先ですね、日本の中での医療もそうですし、一関もそうですけれども、いろんなところでのそのヒントっていう

のが、この病院の中にいっぱい詰まっているような感じがするんですね。その中で「地域包括ケアシステム」ご当地システムっていうところをこう取り組まれている。この取り組みとこれからについて、先生教えてください。

佐藤 「地域包括ケアシステム」っていう言葉自体は、もう20年以上の歴史のある言葉なんです。この数年間、厚生労働省が、全国で急増する高齢者に対する対策として、今までと少し変えて医療と介護がもっと連携して、さらに医療や介護の公的なサービスだけでなく、非公的なインフォーマルって言いますが、身近な地域や家庭の支えっていうものも充てにしながら、これから急増していく高齢者が困らないような社会をつくろうということで、厚生労働省が盛んに提唱しているものです。私たちが今やっている地域包括ケアの仕組みは、国民健康保険診療施設協議会というところの大先輩の広島のみつぎ病院で、今から35年位前から寝たきりゼロ作戦っていうことで始まったものなんです。つまり、病気が治って退院したら、後は病院では関心を持たないっていうふうにして、意外と簡単に寝たきりになってしまう。それで、それをどうやったら寝たきりをゼロにできるかということで、医療を一生懸命やるだけでなく、医療が終わった後に、医療と介護がヘルパーさんと医師とか、あるいは訪問看護師とかそういう人たちが、ずっとこのお家に帰った後もフォローし続けることによって、ようやく治った病気がもう一度悪くなったり、寝たきりにならなうようにする、そういう実践に基づいたものです。私たちのところでもそれを大きな考え方の基礎として実践しているわけですが、藤沢では病院だけじゃなくて病院事業という名前で老人施設とか訪問看護ステーションを一体的に運営することによって、より一層その地域包括ケアの理想の姿に近いことができやすい環境にあると思います。より生活に近いところ、より家庭に近いところと医療がお互いに理解し合うことによって、本当に少ない医療資源ですけれども、そのことが大勢の住民の役に立つものにしていけるとそういうふうに思っています。そのためにはですね、やっぱり

病院の中にいると暮らして見えないので、私たちが住民の中に行く、あるいは家庭訪問して実際のお宅の生活を見る、そういうふうにして、僕らが積極的に住民の気持ちや住民の生活の実態を知りたいっていう気持ちで行動することによって、医療の内容や看護の内容をより地域にとって役に立つものに変えていけるというふうに思っています。そうした考え方の大きな転換を私たちの病院事業では地域包括ケアシステムっていうふうには呼ぶようにしています。

塩竈 藤沢病院のその体制、また特徴を、そして全国の中でも、もしかしたら、そこを注目して藤沢病院に研修にいらっしゃる病院の方が今多いですね。

佐藤 そうですね。地方議会の議員の皆さんとか病院のスタッフ、病院をお持ちの市町村の担当部局の皆さんとかが、年間大勢の方が視察に来て、地域の医療とか地域の医療と介護の運営とかっていうことについてヒントを探しにいただいています。

塩竈 病院ひとつ、その全体をこう見た時のその診療体制とか、それから住民の皆さんの安心感が確立されているっていうところが、まず見えるんですけれども、それに加えて、住民の皆さんが積極的に関わって、その医療体制をしっかりつくっていかうと、それから、その体制だけではなくて、これからより良いものをこう求めていかうところを、みんなの知恵でつくり上げていく、まさに本当に医療文化と言えますか、そういったものを先進的に取り組んでいるところなんだと今日は感じました。

佐藤 医療文化とも呼べるし、あるいは、医療も含めた本当に豊かな生活を考える文化って言っても良いと思いますね。

塩竈 今日の「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」のコーナー、今日は国保藤沢病院におじゃまいたしまして、一関市病院事業管理者の佐藤元美先生にお話を伺ってきました。佐藤先生、素敵なお話どうもありがとうございます。

ました。

佐藤 どうもありがとうございました。

塩竈 いろんな人の知恵、知識、経験、それが詰まってできあがっている町の病院。医療的にもシンボリックな感じがしますけれども、地域づくり、人育て、いろいろなもののシンボリック存在なんだなというのを国保藤沢病院に行ってお話を聞いて、ひしひしと感ずることができました。藤沢地域も加わって8つの地域で成り立っているこの一関の町ですけれども、これまでも「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」のコーナーでは、安心して生活していくための医療体制、どのように作っていったらいいんだろうか、そこに私たちはどう関わっていったらいいのだろうかというところを考えてきましたが、同じ町の地域の中でそれを取り組んで形にしているところがあるんですね。藤沢の皆さんと同じ町の一員になれてすごく幸せだなと感じたそんなひと時でした。

塩竈 「医療と介護の窓～みんなで育てよう地域医療～」一関では、高齢化が進む中、住み慣れた地域で安心して暮らせるよう医療から介護への切れ目ないサービスを目指しています。このコーナーでは、医療機関や介護施設の役割、また、利用方法を、医療・介護・福祉の関係者とそして私たち市民が、ともに理解、協力していくことを目的にお送りしています。地域医療体制の充実のため、私たちも積極的に医療体制づくり、さらに地域づくり、人づくり、いろいろな方面にしっかりと関わっていきたいものです。このコーナーは、一関市健康づくり課の提供でお送りしました。